

CLMV 教育旅行トリビア集

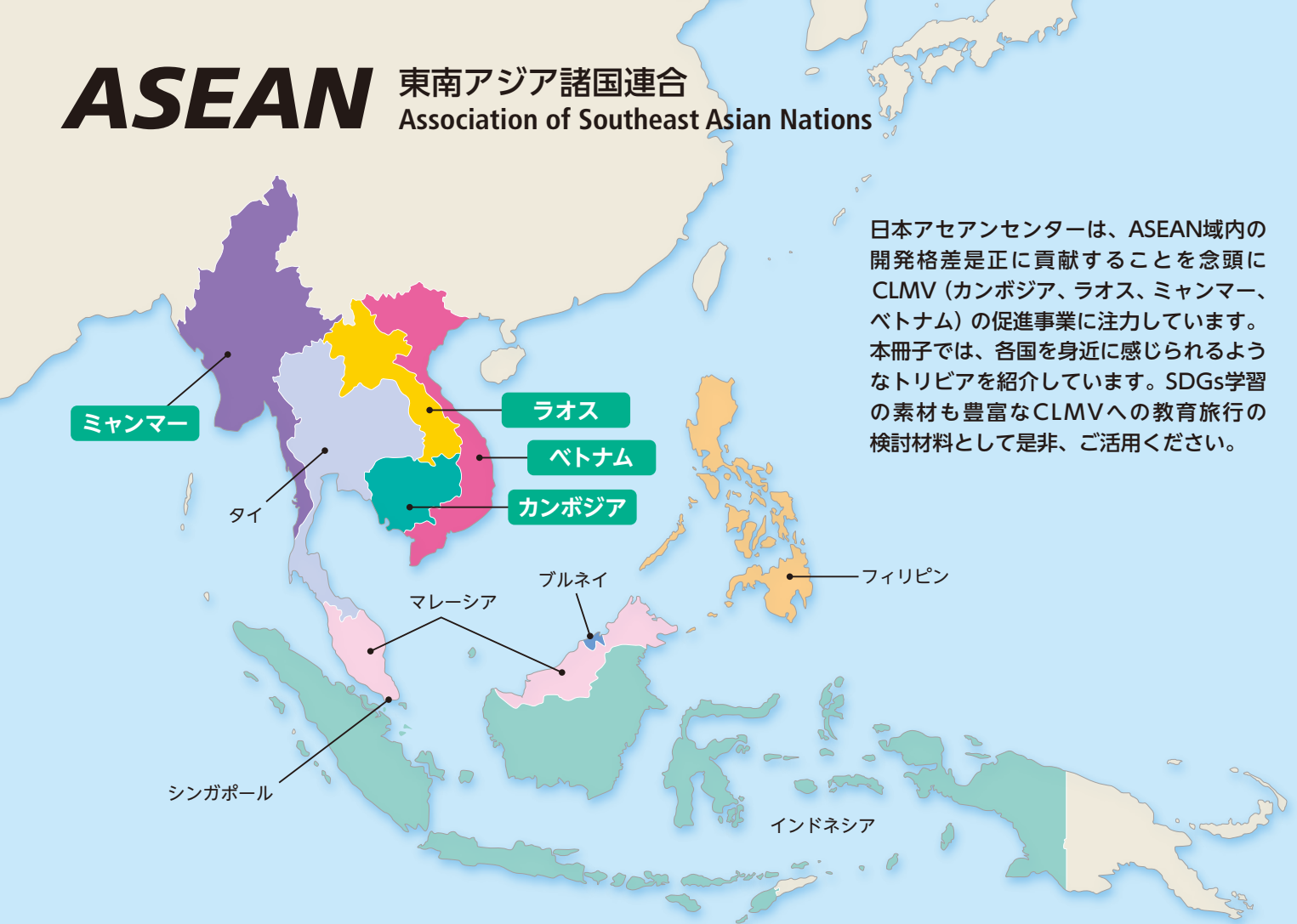
カンボジア・ラオス・ミャンマー・ベトナム
なぜ? から知る
各国の教育材料



国際機関 日本アセアンセンター
(東南アジア諸国連合貿易投資観光促進センター)

ASEAN 東南アジア諸国連合

Association of Southeast Asian Nations



日本アセアンセンターは、ASEAN域内の開発格差是正に貢献することを念頭にCLMV（カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム）の促進事業に注力しています。本冊子では、各国を身近に感じられるようなトリビアを紹介しています。SDGs学習の素材も豊富なCLMVへの教育旅行の検討材料として是非、ご活用ください。

各国基本情報

Cambodia	Lao PDR	Myanmar	Viet Nam
カンボジア  国名：カンボジア王国 Kingdom of Cambodia 首都：プノンペン Phnom Penh 言語：クメール語 時差：日本の-2時間 通貨：リエル / Riel アクセス：成田-プノンペン間に直行便あり（所要約7時間）。バンコク、ホーチミンなどアジアの主要都市を経由する便も多数。 気候：熱帯モンスーン気候で、大きく雨期（6～10月）と乾期（11月～5月）に分かれる。 服装：日本の夏服で問題ない。歩きやすい靴、日除け&冷房対策が必要。雨期は雨具の用意も。	ラオス  国名：ラオス人民民主共和国 Lao People's Democratic Republic 首都：ビエンチャン Vientiane 言語：ラオス語 時差：日本の-2時間 通貨：キップ / Kip アクセス：日本-ラオス間に直行便はなく、バンコクやハノイなどアジアの主要都市を経由する便でラオス各地にアクセスできる（所要約8～9時間）。 気候：熱帯モンスーン気候に属し、3月～5月が暑期、6月～10月が雨期、11月～2月が乾期。 服装：全般的に日本の夏服で問題ないが、乾期の朝晩は冷え込むことがあるので上着が必要。雨期はスコールが降り、道路が冠水することもある。	ミャンマー  国名：ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myanmar 首都：ネーピードー Nay Pyi Taw 言語：ミャンマー語 時差：日本の-2時間30分 通貨：チャット / Kyat アクセス：東京-ヤンゴン間に直行便あり（所要約8時間）。バンコクなどアジアの主要都市を経由する便も多数。 気候：北部は温帯、中南部は熱帯、西部は乾燥帯など地域差がある。大きく3月～5月が暑期、6月～10月が雨期、11月～2月が乾期。 服装：全般的に日本の夏服で問題ないが、乾期の朝晩は冷え込むことがあるので上着が必要。高原地帯は紫外線対策も必須。	ベトナム  国名：ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam 首都：ハノイ Hanoi 言語：ベトナム語 時差：日本の-2時間 通貨：ベトナムドン / Dong アクセス：日本の主要都市からハノイ、ホーチミン、ダナン行きの直行便がある（所要約5～7時間）。 気候：北部は亜熱帯気候で、5月～10月は高温多湿、12月～1月は冷え込むこともある。南部は熱帯モンスーン気候に属し、雨期（5月～10月）と乾期（11月～4月）に分かれる。南北の中間に位置する中部地方は9月～1月が雨期となる。 服装：全般的に日本の夏服で問題ないが、冬場の北部は軽いジャケットが必要。雨期は雨具の用意も。

※ビザの情報は、最新の情報をご確認ください。

カンボジア観光省

Ministry of Tourism, Cambodia

インドシナ半島の南部に位置するカンボジアは、南にタイ湾、タイ、ラオス、ベトナムと国境を接する北部には山々、国土の東部にはメコン川が流れる豊かな土壌を持つ国です。

世界中の旅行者から愛されるユネスコ世界遺産のアンコールワットなど、一般的な観光旅行向けの素材のほか、教育旅行やSDGs（持続可能な開発目標）学習を目的としたさまざまな観光素材が多数あります。

アンコールワットを始めとした歴史、文化が学べる世界遺産の旅、伝統芸能を継承する舞踊などの観劇、東南アジアの珍しい猿や象などの野生動物

保護活動などを学ぶエコツーリズム、地域開発の事例などが学べるコミュニティ・ベースド・ツーリズム（CBT）、地元の人々や学生たちとの文化交流のほか、イベントの開催や野外アクティビティなども多彩に揃い、少人数から200人を超す修学旅行まで対応が可能です。

また、米を主食とした醤油ベースの料理、仏教国ならではの治安の良さ、日本の技術による国際標準の医療施設、日本からの直行便など、ストレスの少ない、安心した学びの旅が楽しめます。



4 ページ

ラオス情報文化観光省

Ministry of Information, Culture and Tourism, Lao PDR

インドシナ半島の中央に位置するラオスは、北は中国雲南省、南はカンボジア、東はベトナム、北西はミャンマー、西はタイとそれぞれ国境を接している内陸国です。年間を通じて美しい自然が広がり、長い歴史に基づく豊かな文化に恵まれたラオスは、世界の旅行者を惹きつけています。

国内には、「ルアンパバーンの町」「ワット・プーとチャンバサク文化圏の関連遺産」「シェンクワン県ジャール平原の巨大石壺群」の3ヶ所のユネスコ世界遺産があり、アセアン諸国のなかでも人気の観光地となっています。

英国の著名な旅行雑誌「ワンダーラスト」誌の

投票では、ルアンパバーンが「一度は訪れてみたい町トップ10」に12回も選ばれました。

ラオスの人たちの温かいおもてなしも旅行者がラオスを旅行先に選ぶ理由のひとつになっています。また、入国ビザが不要な国も多く、旅行しやすい体制も整っています。

静かに休日をご過ごせるだけでなく、ラオスならではのユニークな体験を楽しむことができます。ラオスの人たちは日本からの教育旅行を歓迎します。ぜひ、美しい国ラオスへ。



6 ページ

ミャンマーホテル観光省

Ministry of Hotels and Tourism, Myanmar

ミャンマーは、北部の山岳地帯から南部の海岸線まで、豊かな自然と文化遺産に恵まれ、100以上の少数民族が暮らす国です。教育旅行では、ローカルコミュニティとの相互理解、人材交流、自然環境学習、文化アクティビティなどさまざまなプログラムを提供することが可能です。

具体的には、ボランティア活動、インターンシップ、文化交流、夏期留学プログラムなどのほか、僧侶養成学校での学習などユニークな体験もあります。こうしたプログラムは、主にヤンゴン、マングレー、インレー、バガンで実施しています。

このほか、地元の人たちと交流し、ミャンマー

の日常生活が体験できるコミュニティ・ベースド・ツーリズム・プログラム（CBT）が制度化されています。ミャンマーの多様性と独自性に触れることは、文化や伝統に関するより深い知識が得られる機会となります。現在、このCBTには41ヶ所の村が参加。それぞれがユニークな体験プログラムを造成しています。

さらに、ミャンマー教育省では、数ヶ所のビーチとその周辺を学生向けのレクリエーション地域として整備し、地域学習や文化交流体験の機会を提供しています。



8 ページ

ベトナム政府観光総局

Vietnam National Administration of Tourism

南北にS字型に伸びるベトナムは、多様なライフスタイル、食、文化、自然に恵まれ、若者の冒険心や探究心を刺激する素材に溢れています。都市では伝統と最新トレンドが入り混じり、地方では現在でも川の流れや収穫に合わせた生活が息づくなど、新しいものと古いものが共存しているのがベトナムの大きな魅力です。

ハノイを玄関口とする北部では雄大な山々や奇岩が立ち並ぶハロン湾、中部では砂浜のビーチや豊かなジャングル、ホーチミン・シティを中心とする南部ではメコンデルタの肥沃な大地など多様な自然が旅行者を惹きつけています。

また、地元の新鮮な食材を用いたベトナム料理は世界的にも評価が高く、フォーなどローカルグルメはベトナム名物として親しまれています。さらに、ベトナムには長い歴史があることから、伝統文化や建築、芸術などでも旅行者の好奇心を満たしています。

ベトナムは教育旅行に最適な国です。少数民族、学生、戦争経験者など地元の人々と交流する機会も多く提供できます。ベトナム人の温かいおもてなしは、若者にとって、きっと忘れられない経験となるでしょう。



10 ページ



カンボジア

Kingdom of Cambodia



日本の国際支援と友好関係を知る

500リエル紙幣に日本国旗が描かれている

カンボジアの500リエル紙幣に描かれている図柄から、日本の国際協力と友好関係を紐解くことができます。日本のODA(政府開発援助)によって、2001年にメコン川に全長1,360メートルの「スピアン・キズナ(キズナ橋)」が架けられました。この橋により、首都プノンペンへの交通や物流が劇的に改善。カンボジアの経済は大きく飛躍しました。日本のその功績をたたえ、**500リエル紙幣にはキズナ橋と日本とカンボジアの国旗が刻まれた記念碑が描かれています。**

このほかにも、カンボジアには日本の支援で架けられた橋があり、全長2215メートルの「ツバサ橋」は2015年に完成。プノンペ

ン郊外のメコン川に架かっています。この「ツバサ橋」の姿も500リエル紙幣に描かれています。また、プノンペンのトンレサップ川に架かる「ニホン橋」は、1966年に完成しましたが、内戦によって破壊。1994年に再び日本の援助により「日本カンボジア友好橋」として修復されました。

日本の国際協力について取り上げる際、この500リエル紙幣から話を展開してはどうでしょうか。生徒は「なぜ?」とその理由に関心を持つかもしれません。日本とカンボジアにおける国際協力の歴史やカンボジアと日本の友好関係を知るきっかけになります。



キズナ橋

昔の日本人の仏教観を知る

アンコール・ワットに日本語の落書きが残っている

徳川幕藩体制がまだ整っておらず、鎖国もまだ行われていなかった1632年(寛永9年)、肥後の加藤清正の重臣・森本儀太夫の子で、平戸藩の松浦家に仕えていた森本右近太夫一房という武士が、仏道修行を目的として、アンコール・ワットを訪れました。しかし、長い旅の末にアンコール・ワットにたどり着いた森本は、ここをインドの仏教の聖地「祇園精舎」と勘違いしていたと伝えられています。

現存する「祇園精舎図」(水戸彰考館蔵)が、

アンコール・ワットの実測図とほぼ一致するため、森本だけでなく当時の日本人はここを祇園精舎だと信じていたようです。

森本は、アンコール・ワットの2か所に墨書を残しました。そのうち入口回廊の石柱に残された墨書から次の内容が読み取れます。「寛永九年正月二初而此所二来ル 生国日本肥州之住人藤原之朝臣森本右近太夫一房御堂ヲ心シ数千里之海上ヲ渡リ…」(以下略) 森本や当時の朱印船でカンボジアに渡った

日本人が残した墨書は14か所にものぼります。このことは、活発な交易だけでなく、日本人の仏教観を表す記録ともなっており、カンボジアが当時の日本人にとって身近な存在だったことをうかがわせます。

アンコール・ワットは日本人旅行者にも人気が高く、カンボジアを代表する観光地であり、「アンコール遺跡群」が世界遺産としても登録されています。



「寛永九年正月二初而此所二来ル 生国日本
肥州之住人藤原之朝臣森本右近太夫一房
御堂ヲ心ケ数千里之海上ヲ渡リ
一念之儀ヲ念ジ 生々世々娑婆寿生之思ヲ清ル者也為
其二仏ヲ四鉢立奉ル物也
摂州津国池田之住人森本儀太夫
右実名一吉善魂道仙士娑婆二是ヲ書物也
尾州之国名谷之都後室其
老母亡魂明信大姉為後世二是書物也
寛永九年正月廿日」

カンボジアには高齢者が少ない

カンボジアを訪れると、高齢者が少なく、若者が多いことに気づきます。2020年の人口は約1670万人で平均年齢は24～25歳とされています。少子高齢化が進む日本とは正反対の人口構成ですが、その理由は、カンボジアが歩んできた悲しい歴史にあります。

1975年、それまで米国寄りだったロン・ノル政権に代わって、共産主義のクメール・ルージュが指導者ポル・ポトのもとカンボジアを支配。国名も「民主カンプチア」に改名しました。ポル・ポトは、自給自足の生活を理想とする急進的な重農主義あるいは農本主

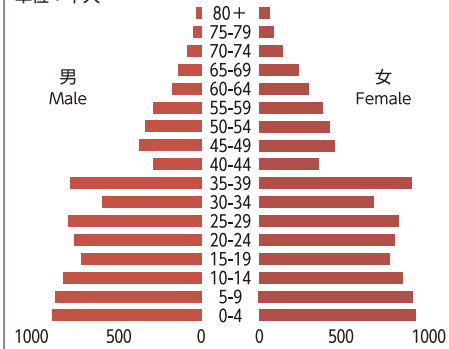
義を唱え、それまでの資本主義社会を支えてきた知識層を排除。1979年に政権が崩壊するまでに、実に国民の約3分の1が虐殺されたと言われています。

しかし、今は若い社会が形成され、カンボジアは、その若い力でASEANの成長エンジンとして機能しています。

超高齢社会の日本の風景に慣れている生徒がカンボジアに着くと、市中の人々の若さにすぐ気づくでしょう。過去を乗り越えた、今のカンボジアのダイナミックさに触れつつ、「なぜ？」を考えることができます。

カンボジアの人口（2020年）

単位：千人



カボチャの語源がカンボジア

日本では、さまざまな料理に使われているカボチャ。その語源は、実はカンボジアから来ていると言われています。

16世紀、インドシナ半島に住んでいたポルトガル人がカンボジアからカボチャを豊後国の宗主であるキリシタン大名の太田宗麟に献上しました。そのとき、その野菜を生産国のカンボジアから名付けた、とする説が有力です。

現在、日本の食卓にのぼるカボチャの9割は「西洋カボチャ」です。「日本カボチャ」の品種は少なくなっていますが、伝統野菜「宗麟南瓜」を復活させる取り組みが、宗麟ゆかりの大分県で行われています。

馴染み深いカボチャの語源がカンボジアとは、多くの生徒にとって未知かもしれません。日本とカンボジアの歴史上のつながりは好奇心を呼び起こす素材です。



岡山学芸館高等学校〈SGHフィールドワーク〉

本校は、文科省のSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を契機に、それまでのカンボジア研修を課題研究用のフィールドワークへと内容を変更しました。社会課題を自分の五感で掴むことを目的に、通常の研修旅行では体験できない内容を盛り込んでいます。

課題研究のカリキュラムでは、これからの地域社会を創造するグローバルリーダーの育成を目標に、社会課題に正面から立ち向かうユース層の育成のために授業を設けています。

事前学習として、カンボジアの歴史講義、訪問先の事前調査等を実施した後、年に2回現地を訪問。1年生は12月に「自らの力で社会課題を明らかにする（フィールドワーク調査）」を目的に渡航します。2年生は8月に渡航し、目標を「社会課題に対するアクションプランの実現（現地実践活動）」とし、授業で取り組んできた課題研究のソーシャルアクション実践に取り組みます。



研修期間中には、1日の経験を振り返るミーティングを每晚実施し、共通のディスカッションテーマに対して1時間～1時間半かけて考えます。生徒の価値観や物事の捉え方が変化する大きなポイントの一つがこのミーティングになっています。

渡航前、生徒はカンボジアの社会課題を極めて表面的に捉えているようですが、現地2日目あたりから、振り返りミーティングの内容が劇的に変化すると毎回感じています。

行程表（2年生）

1日目	岡山駅からバスで関西国際空港へ（宿泊）
2日目	関西国際空港 空路 ベトナム・ホーチミン市経由カンボジア・シェムリアップへ
3日目	午前：チェイ小学校訪問 午後：ゴミの最終処分場訪問／バナナペーパー工房訪問
4日目	午前：養護施設訪問／農家庭状況調査 午後：ローカル病院訪問（カンボジアの医療の現状を聞く）
5日目	Share The Wind（カンボジアの農村部で教育支援と雇用支援について現状を聞く）
6日目	午前：コムルー村訪問 午後：スラム街訪問／Sui-Joh店舗訪問
7日目	午前：チョンクニヤ小学校訪問／ゴミ拾い活動 午後：ソムダイアウ高校訪問
8日目	遺跡観光（アンコール・トム、バイヨン寺院、タプローム寺院、アンコール・ワット） カンボジア・シェムリアップから 空路 ベトナム・ホーチミン市経由関西国際空港へ
9日目	関西国際空港到着 バスで関西国際空港から岡山駅へ



ラオス

Lao People's Democratic Republic



建築物からラオスの歴史を知る

「アヌサーワリー・パトゥーサイ」がパリの凱旋門に似ている

ラオスの首都ビエンチャンを訪れた多くの人は、どこかパリに似た街、という印象を持ちます。ラオスとフランスとの関係は深く、その歴史は19世紀後半の帝国主義時代に遡ります。ヨーロッパ列強がアジア各地を次々と植民地にしていくなか、フランスは1899年、ラオスを保護領としました。

そのフランスの影響の象徴が、パリの凱旋門によく似た「アヌサーワリー・パトゥーサイ」です。戦没者の慰霊碑として建てられたものです。後に王政を廃止し共和制へ移行、慰霊碑は「勝利の門」を意味するパトゥーサイと呼ばれることになりました。荘厳な姿はビエンチャン随一の観光地となっていますが、門自体は未完成の状態です。

フランスの影響が見られるのは「パトゥーサイ」だけではありません。この凱旋門から南側に続く直線通りの景色はシャンゼリゼ通りに似ており、ビエンチャンでパリを模して都市計画が進められたことがうかがえます。

ヨーロッパの東南アジア支配の歴史を勉強するとき、パリの凱旋門とパトゥーサイの写真を並べることで、興味を抱かせるのも一考です。



外国語は必ずしも英語ではないことから、ラオスの国の成り立ちを知る

ラオスは言語が多様

日本で外国語といえば英語が一般的ですが、**ラオスでは多様な言語がコミュニケーションに使われています。**5か国に囲まれた内陸国という地理的な環境にあり、また、大国に翻弄された歴史があります。

1353年に初めて統一国家として成立したラーンサーン王朝は、およそ350年間の繁栄後、3つの王国に分裂し、タイやカンボジアに支配されることになりました。19世紀になると、タイの支配下にあったラオスの3王国は、隣国に対抗するためにフランスと手を結びます。その後、第二次世界大戦では日本、ベトナム戦争ではアメリカに翻弄され、1975年に現在のラオ

ス人民民主共和国が誕生します。

フランスとの歴史的な関係の深さから、かつてはフランス語放送のテレビ局もあり、特に高齢のラオス人にはフランス語を理解する人が見受けられます。

また、地理的環境から、多くのラオス人がタイのテレビ番組を日常的に視聴しています。ドラマなどを楽しみながら、ごく自然にタイ語に親しみ、多くのラオス人がタイ語を理解します。内陸国のラオスでは隣国の文化に触れる機会が多く、その環境がコミュニケーション手段にも影響を与えていると言えます。



国を象徴する動物からラオス人の心を知る

ラオス人は象を大切にする

ラオスの人にとって、象はとても身近な存在であるとともに、神聖な動物として敬われています。その背景には、1353年にラオ人のファー・グム王がルアンパバーン（ルアンパバーン）に「ラーンサーン王朝」を築いたことにあります。ラーンサーンとは「百万頭の象」を意味します。

日本では動物園でしか見ることはできませんが、ラオスでは、今でも貴重な労働力であり、外貨を稼ぐ観光素材としても大切にされて

ています。

一方で、原生林の伐採など環境の変化により象の数が減少していることから、ラオス各地には「エレファント・キャンプ」が設けられ、象の保護活動にも積極的に取り組んでいます。

ラオス人にとって象は、国を象徴する大切な存在です。人々の生活のパートナーとしてどのように象が大切にされているかを知ること、ラオスの暮らしへ目を向けるきっかけになるかもしれません。

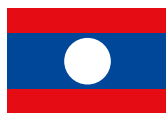


国旗のデザインからラオスと日本に興味を持つ

ラオスの国旗は日本の国旗に似ている

ラオスの国旗は、赤帯に挟まれた青帯の真ん中に白い丸が描かれており、色は違えども日の丸とデザインが似ており、どこか親しみを覚えます。この国旗は、1952年以来、ラオス愛国戦線（パテト・ラオ）が使用していたもので、1975年のラオス人民民主共和国成立時に正式に採用されました。

白い丸は、ラオスの人たちの生活を支える



メコン川にのぼる月を表し、国の統一の意味と明るい未来への願いを込めています。赤は革命で流された尊い血の色、青は国の豊かさを象徴することで、ラオスの過去と現在を表しています。

国旗のデザインに関心を持ち、その国を知るきっかけになれば効果的です。学習後に実際にラオスを教育旅行で訪れて、ラオスの国旗を目にした時の生徒の感じ方は変わってくるでしょう。



愛知県立常滑高等学校〈海外研修〉

本校は、2017年から本校独自のラオス研修旅行を隔年で実施しています。1週間の滞在中、ビエンチャン高校との文化交流、ホームステイなどを行い、ラオスの伝統文化を体験するとともに、現地の青年海外協力隊の活動の視察などを通じて、日本を外から客観的に眺め、自分の価値観を見直す機会を得ることで、生徒たちは大きく成長して帰国しています。

目標は、ラオスの伝統文化を体験することに加えて、日本とラオスの関係、国際協力の視点から研修を行うことです。また、お互いをよく知ることによって相互理解を深め、ラオスだけでなく世界とのつながりを意識するところにあります。研修に参加していない生徒とも研修での学びを共有し、ラオスの学校に図書室をつくる学校全体での活動にもつながっています。

研修旅行前の事前学習は8回程度実施しています。生徒たちは、そのなかで自分たちの研修旅行でのミッション10か条を考え、そ



の達成を常に意識しながら研修期間を過ごします。研修中には振り返りやディスカッションの機会を設け、それぞれの感想を共有することでより充実した研修になるように心がけています。

生徒の感想からは、多くの学びを得たことがうかがえます。ラオスの人々の優しさ、英語によるコミュニケーションの楽しさ、国際協力の大切さなどに気づくとともに、幸せについての価値観を考えるきっかけにもなっているようです。

行程表

1日目	中部国際空港 空路 ベトナム・ホーチミン市経由にてラオス・ビエンチャンへ
2日目	午前：JICAラオス訪問/パトゥーサイ見学 午後：JICAシニアボランティア（看護師）の活動現場（セタティラート中央病院）視察 ビエンチャン高校/ホストファミリー宅で3泊4日のホームステイ
3日目	午前：ホスト生徒と一緒にホアンカオ稲穂保育園・幼稚園・小学校訪問 園児との交流 ホアイホン職業訓練センターで染色体験 午後：ADDP（アジアの障害者活動を支援する会）手話教室・卓球バレー体験 COPEビジターセンター見学
4日目	一日ホストファミリーと過ごす
5日目	午前：ビエンチャン高校訪問 午後：ナーカー中等学校訪問 寄贈した図書室見学
6日目	ルアンパバーンへ観光（ワット・マイ、王宮博物館、プーシーの丘から夕日観賞）
7日目	托鉢体験／朝市見学／ワット・シェーン見学／デッカンパー孤児院訪問（生徒たちとの交流、手洗い指導など） メコン川クルーズ／パクウ洞窟見学 ラオス・ビエンチャンから 空路 ベトナム・ハノイ経由にて 中部国際空港へ
8日目	中部国際空港到着



ミャンマー

Republic of the Union of Myanmar



首都移転の表裏から政治について知る

首都がヤンゴンからネーピードーに移った

ミャンマーの首都ネーピードーは、800万人以上の人々が暮らすヤンゴンとは対照的に落ち着いた雰囲気が漂っています。整然と区画整理された「王の都」という意味のネーピードーは、2006年にヤンゴンから遷都され、当時の政権によってゼロから造り上げられました。国会議事堂などの行政機関のほか、ヤンゴンの「シュエダゴン・パゴダ」の実物大レプリカ「ウッパタサンティ・パゴダ」も建立され、ミャンマーの政治や行政の中心として発展しています。

2011年にはネーピードー国際空港も開港。タイや中国などへの国際線も就航しました。

遷都した理由は明らかにされていません。ヤンゴンへの一極集中を解消する、海に近いヤンゴンよりも内陸のほうが国防上の利点がある、国内の少数民族に配慮するなどさまざまな理由があると考えられています。

世界には首都を移転する国があります。それぞれに独自の理由・背景がありますが、国民の生活にどのような影響があるのか考えるきっかけになります。



日本車の普及率から日本とミャンマーの経済関係を知る

ミャンマーには日本車が多い

ミャンマーの街では、「〇〇商店」「〇〇運送」「〇〇観光」と日本語の社名が書かれたままの車体のトラックやバスを見かけます。その理由は、規制緩和によって日本からの中古車輸入が急増したことにあります。また、車体の日本語をわざと残しているケースもあります。費用の問題だけでなく、日本と同じように外国語（日本語）がカッコよく見えるメンタリティーがミャンマーにもあるようです。

ミャンマーで日本の車はすっ

かり身近な存在になりましたが、年々増加する日本車は、日本とミャンマーの経済関係拡大の象徴にもなっています。

現在、ミャンマーの主要貿易国として、日本は輸出入ともトップ5に入っています。日本もミャンマーをASEANの成長センターとして、経済関係をさらに発展させていく方針を掲げています。最大都市ヤンゴンの2つ目の空港建設事業も日本の支援で進められる予定です。



民族衣装から文化を知る

男性も女性もロンジーをはく、顔を白く化粧する

ミャンマーでは、男女ともにロングスカートをはいています。これは「ロンジー」と呼ばれる民族衣装で、風通しがいいことから、暑いミャンマーでは快適に過ごすことができ、参拝の際に素肌を隠すこともできるため、日常的に着用しています。

日常的に民族衣装を着る習慣は日本にはなくなりつつありますが、ミャンマーの人たちにとってロンジーがとても身近なものである

ことが分かります。

日本在住のミャンマー人の中では、東京の生地店で和柄の布を購入してロンジーを作るのも人気です。

また、男女ともに頬や額に「タナカ」と呼ばれる白粉を塗っている姿も、日本人には珍しい光景です。タナカという木から採ったもので、化粧というよりも、日差しが強いミャンマーでは日焼け止めや美肌のために使われ



ています。特に女性や子どもが塗っている場合が多く、露店やスーパーなどで簡単に手に入ります。最近ではお土産として購入する観光客も増えてきました。

古い文化からミャンマー人の信仰を知る

ミャンマー人は自分が何曜日に生まれたかを知っている

日本人は、自分の誕生日は知っていますが、生まれた曜日まで覚えている人はそういません。一方、ミャンマー人は自分が何曜日に生

まれたかを必ず知っています。ミャンマーには古くから「八曜日占い」という占星術があり、現地の人たちにとっては今でも生活の一部になっているからです。



八曜日では、水曜日が午前と午後に分けて考えられているため、月曜日から日曜日までで、全部で8つの曜日が存在します。八曜日にはそれぞれ定められた方位、星座、守護動物が割り当てられており、生まれた曜日によって、基本的な性格や人生、他人との相性も決

まってくると信じられており、ミャンマーの人たちは自分の誕生日の曜日を非常に大切にしています。

自分の子どもに生まれた曜日にちなんだ名前をつける風習があり、パゴダでは自分の生まれた曜日の場所で祈りを捧げる習わしもあります。

八曜日のなかで最も縁起がいいとされているのは、仏教の開祖である仏陀が悟りを開いたとされる木曜日。お参りや結婚など人生の節目に行う催事に最適な曜日とされています。さまざまな外国文化を知ることは面白いことです。日本ではあまり意識されないことが、他国では人々に大きな影響を与えていることを、楽しみながら学べます。

千葉県立千葉商業高等学校〈海外研修〉

本校は、平成27年度第6回高校生国際交流事業として、3泊5日の日程でミャンマーを訪問しました。この国際交流事業の目的は、商業教育の振興と発展を目指して、広く海外に日本の商業教育を紹介するとともに、海外の商業教育を学ぶ生徒との交流を通して視野を広げ、国際感覚を身につけることです。

訪問団は、珠算、電卓、簿記、ワープロ、情報処理の競技大会・コンクールの団体優勝校から各3名、引率教諭5名、事務局1名など総勢22名で編成され、本校は情報処理競技大会優勝校として参加しました。各種競技大会・コンクールの日本一のメンバーが一堂に会する貴重な機会になったとともに、商業教育の発展のためにも有意義な研修旅行になりました。

現地では、ヤンゴン経済大学を訪れ、学生



と交流を深めたほか、日本の商社のヤンゴン支店やミャンマーの銀行も訪問。ミャンマーが抱えている経済的な課題や国際協力の重要性などを学びました。また、ティラワ経済特区や商業施設を訪れ、ミャンマーの産業振興の現場を視察しました。

参加生徒は、ミャンマーの生活に触れることで、日本との文化の違いを実感したほか、

仏教の教えを心の支えにする国民性にも感銘を受けたようです。また、インフラ整備や電力事情など、経済面での学びも大きく、英語でのコミュニケーションの難しさや大切さを改めて感じたとの声も聞かれました。

行程表

1日目	成田国際空港 空路 ミャンマー・ヤンゴンへ
2日目	ミャンマー日本協会の歓迎レセプション ヤンゴン経済大学訪問 ヤンゴン市内文化施設訪問
3日目	住友商事ヤンゴン支店訪問 三井物産ヤンゴン支店訪問 KBZ Bank 本店訪問
4日目	ティラワ経済特区訪問 商業施設視察 ミャンマー・ヤンゴン 空路 成田国際空港へ
5日目	成田国際空港到着



ベトナム

Socialist Republic of Viet Nam



日本経済が外国に与える影響を知る

バイクのことを「ホンダ」と呼ぶ

ベトナムを訪れると、バイクの多さに驚きます。ハノイやホーチミン市などの都市では、交差点の最前で信号待ちをしているバイクの大集団を、ベトナムらしい光景として写真に収める観光客も多くいます。そのバイクのことをベトナムでは「ホンダ」と呼んでいます。「スズキ」も「ヤマハ」も走っていますが、「ホンダ」がバイクの代名詞になっています。

ホンダがベトナムに最初にバイクを輸出し

たのは1967年のこと。それを機に、ホンダのバイクがベトナムを席巻し、ブランド力が高まりました。1996年には現地にホンダベトナムも設立され、現地生産が始まりました。

ベトナム人にバイクを指して、これは何と聞くと、力強く「ホンダ」と返ってきます。生徒の「なぜ?」を引き出すことで、海外に普及する日本製品について学び、外国社会に進出することの意味を考える機会を与えます。



ベトナムの歴史遺産から日本との交易の歴史を知る

ホイアンに「日本橋」という名前の橋がある

ベトナムの古都で、世界遺産のホイアンの中心部に架かる小さな木造屋根付きのアーチ橋「来遠橋」は、ホイアン観光のハイライトです。その命名は論語の「朋あり遠方より来たる」から引用されたと言われています。

その歴史は古く、1593年に当時ホイアンに居住していた日本人が架けたとされています。当時は徳川幕府の鎖国政策前で、ベトナム(安南国)は朱印船貿易の重要な相手国だった

ことから、ホイアンにも多くの日本人商人が住んでいました。ベトナムと日本との友好を示す橋として、親しみを込めて別名「日本橋」と呼ばれ大切にされています。

橋の中央にはカウ寺、橋の両端には建築の開始と終了時の干支であった申と戌の像が建てられています。1990年にはベトナムの歴史的・文化的名跡にも指定され、ベトナムの紙幣にも描かれています。



紙幣にも印刷されているホーチミン

ベトナムの通貨ドンには種類と桁が多い

日本人旅行者がベトナムで買い物をすると、紙幣の種類の多さと桁の多さに戸惑ってしまうことがしばしばあります。紙幣の種類は、100ドンから50万ドンまで実に12種類。その桁を見ると、大金を抱えているように錯覚しますが、一番高額の50万ドン紙幣でも現在のレートで約2,240円(2021年1月5日時点)ほどです。

その理由は、1980年代半ばから1990年代初めにかけて急激なインフレに見舞われたため、現在でもデノミは行われず、もとの通貨価値で流通しています。

しかし、1986年から始められた改革開放政策「ドイモイ」によって、社会主義経済から市場経済に転換。その成果は着実に表れ、2019年の経済成長率は7.02%(ベトナム統計総局)になるなど、通貨ドンも安定しています。

すべての紙幣の表面にはベトナム民主共和国建国の父ホーチミンが描かれています。ホーチミンは、国家主席になっても質素な生活を送り、その姿勢は多くの国民に慕われ、今でも親しみを込めて「ホーおじさん」と呼ばれています。念願の南北統一を見届けるこ



となくこの世を去りましたが、南部のサイゴン市は統一後に「ホーチミン市」に改められました。

日本語に似たベトナム語がある

外国語を学ぶのは難しいものですが、日本語とベトナム語に意外な共通点があります。両国とも、文化的・歴史的に中国の影響を大きく受けており、**日本語と同様にベトナム語も、その単語の6～7割が中国語の漢字由来していると言われています。**

文字で見ると、「ありがとう」の「カムオン」の由来は「感恩」。漢字を当てはめると類推しやすくなります。

また、ベトナム語の発音は、日本人にとっては難しいと言われていますが、似ている単語も多く、たとえば「注意」はベトナム語で「チュイー」、「同意」は「ドンイー」、感動は「カムドン」、記念は「キーニエム」といい、その例は枚挙にいとまがありません。

言語形成の歴史が日本語とベトナム語の共通点を生んでいることは驚きとともに「なぜ？」を生徒に感じさせます。親近感をもつことは語学学習の入り口としても役立ちます。形成の経緯を知ることによって生徒がベトナム、さらにはベトナム語に関心をもって学ぶことができます。

ベトナム語	日本語
cảm ơn (カムオン)	ありがとう (感恩が由来)
chú ý (チュイー)	注意
đồng ý (ドンイー)	同意
cảm động (カムドン)	感動
kỷ niệm (キーニエム)	記念

大阪府立寝屋川高等学校〈修学旅行〉

本校がベトナムを海外修学旅行の行き先として決めた理由は、日本では経験できない多様性に触れ、成長途上のベトナム経済に触れることで「グローバル」を意識するきっかけとし、また戦争の爪痕を学ぶことで「平和」について学習する機会があると考えたからです。さらに、治安・安全面からも適切であることが決定の要因になりました。

ベトナム修学旅行を実りあるものとするために事前学習として次の3点を実施しました。①ベトナムの地理・歴史・生活・経済について概要を学習。②平和学習としてベトナム戦争について学習。③現地校との交流に向けて、初歩的な会話レベルのベトナム語講座を実施。

特に②については、戦争の悲惨さを理解するよい機会となり、博物館における生徒の積



極的な見学の姿勢がその成果として見られました。経済に触れる点に関しては、日本でも一定程度馴染みのある現地の企業を訪問し、生の声を聴くことで世界とのつながりを実感できました。

また、本校は4年前にベトナム修学旅行を実施して以来、現地の高校との交流を継続していますが、その体験は、日本の伝統文化を伝えることで日本を外側から客観的に見る態

度の育成の一助となっています。

帰国後の生徒からは、「ベトナムの高校生は積極的で大きな夢を持っている」「海外で働く選択肢もありと認識」「世界観が変わった」など前向きな感想が多く聞かれました。

行程表

1日目	関西国際空港 空路 ベトナム・ホーチミン市へ 聖母マリア教会・中央郵便局、水上人形劇鑑賞 市内スーパーにて食料品買出し
2日目	午前：統一会堂見学、戦争証跡博物館 午後：ドンコイ通り及びペンタイン市場などエリア限定のB&Sプログラム
3日目	午前：現地校VNUとの交流 午後：企業訪問
4日目	午前：ミトーのメコン川クルーズ 午後：ペンタイン市場、サイゴンディナークルーズ ベトナム・ホーチミン市 空路 関西国際空港へ
5日目	関西国際空港到着

奈良学園中学校・高等学校〈SSH海外研修〉

本校は、2012（平成24）年に文部科学省より第1期の指定を受けたスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の取組の一つとして、ベトナム社会主義共和国での海外研修を実施しています。

この研修では両国初の高大連携事業として始まったハノイ工科大学とのサイエンス交流や、グエンシュ高等学校との生徒間交流を通して、英語を母国語としない者同士で英語を介した交流を行い、コミュニケーションツールとしての英語の重要性を認識することを目指すの一つとしています。

また、環境保全実習としてホン川（紅河）マングローブ林の調査、地域空間論に基づく農村地域等のフィールドワーク、東南アジアで活躍する日系企業を訪ねての海外キャリア研修、最先端の保存修復科学技術や文化交流



の歴史について学ぶ史跡見学など、本校SSHの取組の課題としても挙げている「持続可能な社会を構築できる人材の育成」を達成するための研修として、内容は多岐にわたっています。

海外研修に先立ち、それぞれの研修内容に関する事前研修を7回実施し、研修後も学内報告会での発表を含めた事後指導を行っています。自然と共存した循環型の持続可能な生

活を送っている人々と実地で交流することで、気候や風土、文化の違いが生活に大きな影響を及ぼしていることに気づき、生徒たちは、異なる価値観をもつ人と積極的に関わり、共生・協働する心を養うことができました。

行程表

1日目	関西国際空港 空路 ベトナム・ハノイへ ハノイ民族博物館研修
2日目	私立グエンシュ高等学校とのサイエンス交流
3日目	A班：国立ハノイ工科大学とのサイエンス交流 ベトナム教育訓練省表敬訪問 B班：ホン川（紅河）河口 環境調査研修
4日目	タンロン遺跡・文廟見学 海外キャリア研修
5日目	ハノイ市ドンラム村フィールドワーク（家屋調査・聞き取り調査・文化研修） ベトナム・ハノイ 空路 関西国際空港へ
6日目	関西国際空港到着

日本アセアンセンターは、ASEAN加盟国政府と日本国政府との協定によって1981年に設立された国際機関です。正式名称は「東南アジア諸国連合貿易投資観光促進センター」といい、日本とASEAN諸国間の「貿易」「投資」「観光」という3分野における経済促進と、「人物交流」の促進を主な目的として活動しています。

活動内容

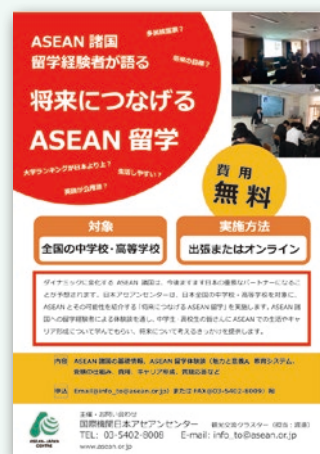
小学校向け ASEAN出張授業

東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県の小学校にASEAN諸国出身者を派遣し、児童にASEAN諸国の文化、言語などを紹介する出張授業を行っています。全国の小学校を対象にオンライン授業も実施しています。



中学校・高等学校向け 「将来につなげるASEAN留学」

中学校・高等学校を対象に、ASEAN諸国への留学経験者の体験談を通し、生徒が海外進学やキャリアビジョンについて考える機会を提供する出張授業を行っています。オンライン授業も実施します。



グループ訪問の受け入れ

東京に修学旅行中の中学校・高校生を始め、各種団体にASEAN諸国、日本とASEANとの関係やセンターの活動について学んで頂く機会を提供しています。オンラインでも実施しています。



東南アジアへの教育旅行セミナー

東南アジアへの教育旅行について知りたい、興味があるという学校のための情報収集の機会として、教育旅行先としての東南アジアを紹介するセミナーを開催しています。

